

○今昔館の近代展示室を愉しむ(6) 空堀通 一商店街・路地・長屋一

今回は、「住まいの大阪六景」のひとつ、「空堀通 一商店街・路地・長屋一」の模型を紹介します。この模型は、昭和13年(1938)8月、地藏盆の日の昼下がりを再現しました。



「空堀通 一商店街・路地・長屋一」の模型

大阪市中央区空堀地区は、戦災を免れた地域で古くからの町家や長屋が多く残っています。空堀という地名は、空の堀＝水の溜まっていない堀からきているといわれ、豊臣大坂城の南総構堀があったところと言われています。上町台地の上に位置しており、大坂城の一番の弱点と言われる南面に防御のための堀が掘られましたが、水を溜めることはできませんでした。水のない堀＝空堀です。

江戸時代にはこのあたりは瓦を造る土を採っていたところで、江戸中期頃から市街化し、明治時代には商店街になっていました。瓦の土取場の跡地とあって、掘り下げられた土地に長屋が建てられていて、思いがけない高低差にびっくりさせられます。大河ドラマ「真田丸」が放映された影響もあって、現在注目されているエリアのひとつです。

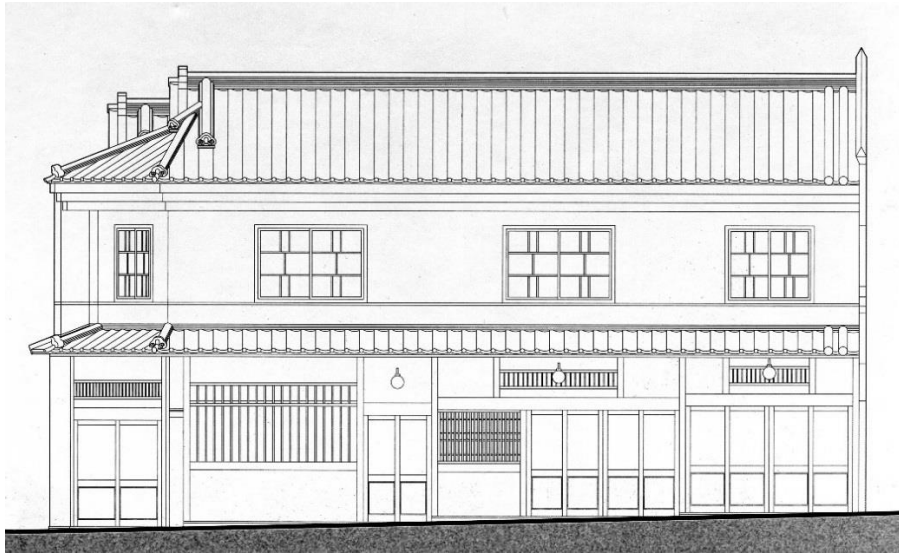
この模型は、空堀通と善安筋が交差する辺りを切りとって製作しました。写真の左が北です。現地での実測調査や聞き取り調査、そして資料調査(古写真や航空写真、文献調査)を行い、昭和13年(1938)8月の地藏盆の日という設定をしました。町並みだけでなく、人々の暮らしや生業を詳細に再現しています。



昭和23年 米軍の撮影による航空写真の空堀地域
(国土地理院HPより)

上の写真左側の川は東横堀で、その東(右)側の大通りが松屋町筋です。松屋町筋の東側、上町筋との間の黒っぽい屋根がびっしりと写っているところが戦災を免れたエリアです。長堀通の北にある榎大明神のえんじゅ(槐)の大樹が、炎を食い止めたことによって、奇跡的に延焼を免れたとも言われています。

ちなみに、槐は中国原産のマメ科の落葉性の樹木です。日本には仏教が伝わった頃に、槐も伝わったと言われています。大気汚染に強いので、街路樹として見かけることができます。また、建築材としても使われることもあります。開花期が過ぎると数珠のような実をつけます。



空堀の表長屋(「近代都市住宅年表」)

「近代都市住宅年表」の下の段には各時代の代表的な住宅の立面図が同じスケールで描かれており、空堀の表長屋もあります。模型制作に使われた立面図で、空堀通りに面して角地に建っている表長屋です。



南から見た空堀通りの模型の写真です。左上が立面図の表長屋になります。手前の表長屋の裏側に、物干台がずらりと並ぶのが圧巻です。



空堀通に面した両側の町並み

左手前から2軒目が立面図の表長屋で、角地に建ち隅切りがあります。空堀の通りは煉瓦舗装が施され、往来には自家用車(トヨタA4型・昭和11年製)や人力車、大八車、自転車が往来しています。しゃれた街頭は「すずらん灯」と呼ばれていました。表を掃く人、水撒きの人、通行人、そして、八木歯科医院の前で駄々をこねている子どもなどがいます。手前の町家は、断面模型になっているので、室内の様子がよくわかります。



看板は変わっていますが、現在も残る「ぜにや」ふとん店。



善安筋の坂の突当りは寄席の喜楽亭。冒頭に野漠が出てくる「らくだ」や高津神社が出てくる「高津の富」などが演じられました。この建物は屋根が入母屋造りで越屋根がついた立派なものでした。



表通から見ると2階建てですが、裏側は地下2階まであります。



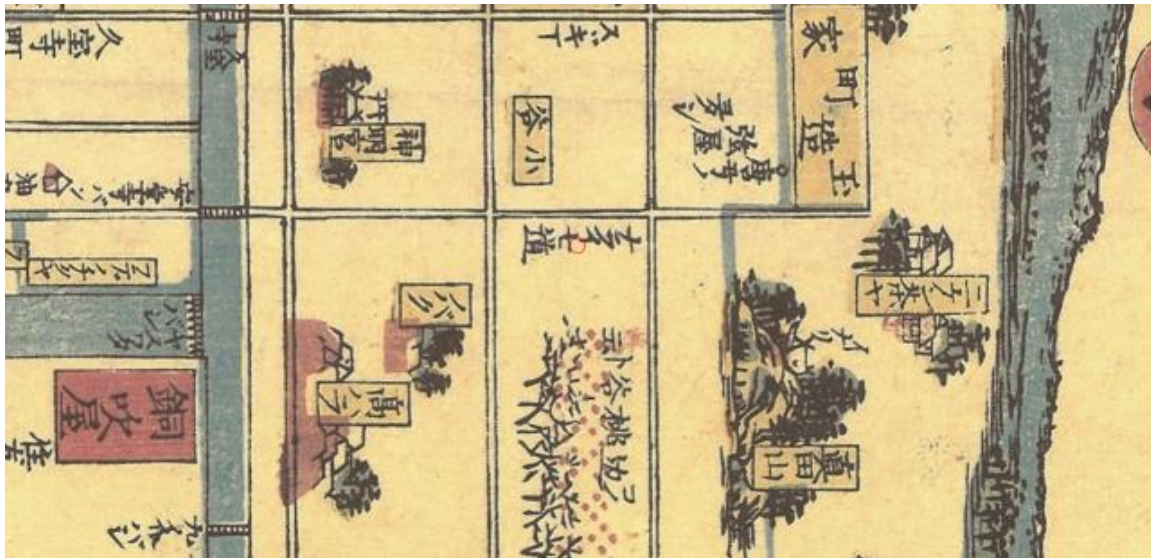
そして、裏長屋の路次には、行水の子どもや洗濯するおばさんがいます。



旧暦7月24日、昭和初期には夏休みが終わる前の8月24日に地蔵盆がありました。子どもたちが大きな数珠を囲んで座り、お坊さんの読経にあわせて順々に回す、数珠回しの風景です。その後、お供物のおさがりをみんなでいただくのが楽しみでした。提灯は町内のおじさんの手作り。

それでは、江戸時代の空堀周辺の町の様子を、幕末に刊行された「浪華名所獨案内」(「津の清」蔵、今昔館9階にパネル展示しています。)で見てください。

安堂寺橋から東に向かう道に「ナライセ道」とあり、玉造町家の南に「ニケン茶ヤ(二軒茶屋)」とあります。暗峠奈良街道にあたります。東横堀と長堀が交差するところに「銅吹屋」(住友家)があり、その東側一帯が空堀にあたります。「ノバク」「高ハラ」「コノ辺桃谷ト云」の文字があります。



「浪華名所獨案内」の空堀付近(「津の清」蔵)



「天保新改攝州大坂全圖」の空堀付近 (天保8年、日文研蔵)

天保8年(1837)刊行の「天保新改攝州大坂全圖」(国際日本文化研究センター蔵)を見ると、道路の様子も詳しく描かれ、御城代屋敷や御太鼓坊、御蔵があります。「清水谷屋敷ト云」という文字や、真田山、真田山イナリもあります。その西側、東横堀に架かる安堂寺橋、末吉橋、九ノ介橋との間が現在の空堀にあたります。このあたりには、同心の屋敷のほか、「■印十一ヶ所 字瓦土取場」があります。大坂城南総構堀の跡地周辺が、瓦土の取場となり、土を取った後に長屋が建てられていることがわかります。

つぎに、8階フロアの中央にある「大阪市パンorama地図」で、当時の様子を見てみましょう。鳥瞰図ですので左上が北になります。

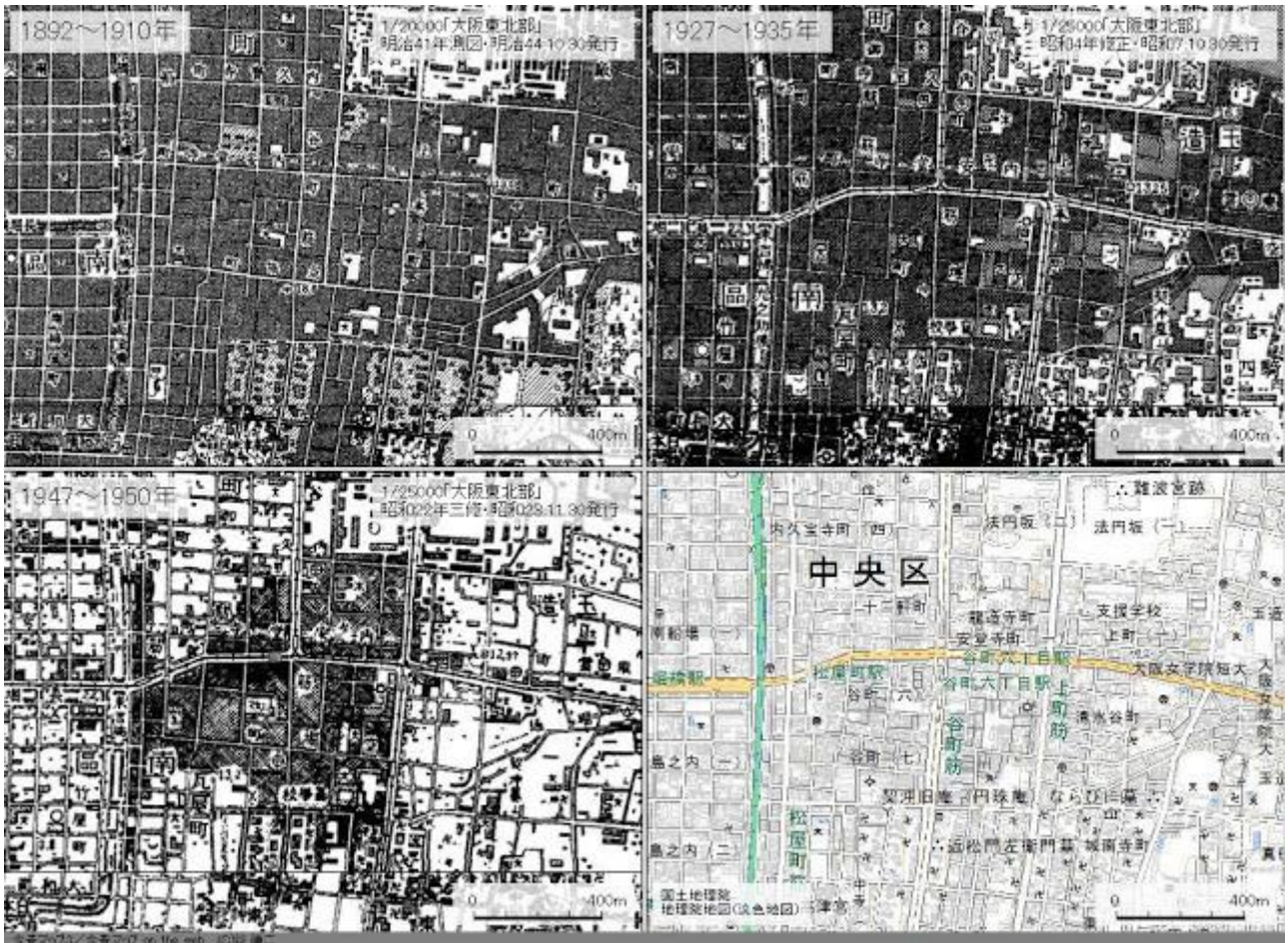
東西の通り(現在の長堀通と千日前通)には市電が通っています。南北の通りは谷町筋を北から六丁目まで、上町筋を上本町2丁目から南へ市電が通っています。空堀のあたりは、谷町筋の拡幅前で市電は上町筋に迂回し、住宅と寺院がびっしりと建っています。南側には、高津神社、生魂神社も描かれています。



「大阪市パンorama地図」の空堀付近
(大正13年、大阪くらしの今昔館蔵)

最後に、今昔マップ3を使って、空堀付近の変遷を見てみましょう。

左上は明治41年、江戸時代の町割がほぼそのまま残っています。右上は昭和4年、長堀通と谷町筋、上町筋に市電が通り、道路が拡幅されています。長堀通よりも南の谷町筋は未拡幅です。左下は昭和22年、空堀から安堂寺町周辺のみが戦災を免れた様子がよくわかります。右下は、現在の国土地理院地図です。谷町筋が拡幅されました。地下鉄谷町線と長堀鶴見緑地線が通っています。



明治41年・昭和4年・昭和22年の地形図、最近の国土地理院地図の
空堀付近(今昔マップ3)

都心部にありながら奇跡的に戦災を免れ、今なお戦前の佇まいを残すまちが空堀です。長屋や町家、坂道や石畳の路地など、表情は豊かで人と人とのつながりが残っています。地元の空堀まちなみ井戸端会の皆さんは、平成16年度からHOPEゾーン事業を活用し、「お地蔵さんが見守るつながりを生かすまちなみ」をテーマに、地域資源の掘り起こしや情報発信、建物の修復整備など、空堀の特性を活かしたまちなみづくりに取り組んでおられます。